東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

青木栄一先生のご逝去を悼む（紙碑）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小松,丘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166772

学芸地理 76 号 2020 年 pp.1-2

青木栄一先生のご逝去を悼む

東京学芸大学地理学会名誉会員で東京学芸大学名誉教授の青木栄一先生は2020年5月4日，87歳の生涯を終えられた．去る2009年に，後述する交通地理ゼミの席上，脳梗塞で倒れられ，10年余にわたり懸命の闘病生活やリハビリを続けられていた．

青木先生は1932年，東京のお生まれで，千葉大学（工学部入学）文理学部卒業後，東京教育大学大学院を修了された．修士論文は「第二次大戦における船舶被害の分布について」，博士論文は「日本の私鉄における貨物輸送の地理学的研究」であった．このころからすでに，鉄道と船舶の両方を研究の対象とされていたことがうかがえる．

その後，1965年4月から都留文科大学，1974年4月から防衛医科大学校に奉職され，東京学芸大学へは1975年4月に着任された．定年退官後，1996年4月に駿河台大学に移られ，2004年3月に退職された．東京学芸大学在任中は，海外子女教育センター長や附属大泉中学校長（兼）附属高等学校大泉校舎主事併任を歴任された．東京学芸大学地理学会では，1982～83年度および1988～89年度の4年にわたり会長を務められた．

青木先生の執筆活動は学術誌の論文にとどまらず，「鉄道ピクトリアル」「鉄道ジャーナル」「世界の艦船」など商業誌の論説にも見られる．青木先生の東京学芸大学退官や駿河台大学退職にあたり，私は著作目録の作成に携わる機会を得たが，その幅の広さと数の多さには目を見張った．商業誌上でのご活躍に対し，一部には疑問視する声もあったと聞くが，正確で膨大な量の知識に裏打ちされた解説，的を射た結論や提言の数々は，青木先生でなければ成し得なかったものである．これらの地道な積み重ねが，『シーパワーの世界史』①②，『鉄道忌避伝説の謎―汽車が来た町，来なかった町』，『交通地理学の方法と展開』などの単著や，編著『日本の地方民鉄と地域社会』に結実した．その中で，ミクロでもマクロでもないメソスケールの観点で，地方史的・産業史的アプローチから地域社会と鉄道との関わりを論じる手法は，青木先生の研究の代表格ともなった．

2004年10月14日（鉄道記念日）に行われた義経号（蒸気機関車）の鉄道記念物指定記念式典（除幕式）で挨拶される青木栄一先生（京都鉄道博物館にて）
青木亮氏（ご子息）提供

さて，青木先生が東京学芸大学に着任後の1970年代後半から1980年代前半にかけての地理学教室は，単位取得とは関係のない自主ゼミが続々と誕生していた時期であった．青木先生のもとにも鉄道やバス，船好きの面々が集ま

り，週１回の交通地理ゼミが開かれていた．内容は，大学のカリキュラムにはない様々なテーマで専門書の輪読を行い，議論を深めるものである．青木先生は東京学芸大学以外の学生・院生にも広く門戸を開放しておられたので，他流試合ともいえるゼミには講義では味わえない緊張感があり，有意義な「第５限」だった．このゼミは青木先生が駿河台大学に移られてからも，開催場所を定めずに続き，多くのOB・OGが巣立っていった．

私事に及ぶので恐縮だが，私は学部・院生時代に青木先生から，日本地理教育学会の学会誌「新地理」の編集アルバイトを半ば強制的（？）に仰せつかった．しかし，これがきっかけで私は教職以上に書籍編集という仕事に興味を持ち，自分の適性がどちらにあるのか考えざるを得なくなった．悩んだ末に編集を生涯の生業に選ぶのだが，編集者として今の私があるのは，青木先生がレールの最初の区間を敷いてくださったおかげと言っても過言ではない．青木先生にとっては，私の適性を見抜いたうえでのアルバイト紹介だったのかもしれない．

閑話休題．訃報に接してからすでに季節がいくつか変わったが，私には青木先生の様々なお姿が浮かんでくる．1980年の夏，東京で開催されたIGC（国際地理学連合）国際地理学会議では，交通地理学部会オーガナイザーという重責を担って，事前準備から事後処理まで奔走された．いっぽう，日々の講義では，学生の顔を確かめつつ反応を見るというよりは，やや斜め上に視線を上げ，淡々とお話になっていたお顔が印象に残る．

卒業論文や修士論文の添削指導は，東京学芸大学からほど近いところにあるご自宅の応接間でも行われた．我ながら良くできたと思い持参した原稿に，丁寧な筆致ではあるが容赦のない赤ペンの嵐が見舞われた．

地理学教室や交通地理ゼミのコンパでは，右手を軽く上下に振りながらリズムを取って，十八番の『地理教育　鉄道唱歌』を熱唱された．ときに歌詞の解説を交えるので，それはあたかも巡検のようであった．

ご一緒した学会や調査旅行の帰途，プライベートでの鉄道写真撮影では，まさに鉄道少年の姿そのもので，私との20歳あまりの年齢差を全く感じないほどのスタミナとパワーがあった．ご本人曰く，「僕は中学・高校時代は運動会や体育祭の花形だった.」というのも，うなずける話であった．

青木先生は，お亡くなりになった日をもって正四位に叙位され，瑞宝中綬章が贈られた．車椅子に座るお姿であっても多くの人と祝意を表したかったのだが，それは叶わぬ夢となってしまった．

青木先生ご夫妻に媒酌人をお願いした指導学生夫妻は，毎年正月ご自宅にご挨拶に伺うのが恒例だった．その際は，奥様の克子様の手料理をご馳走になるのだが，先生がお亡くなりになってからわずか２か月半後の2020年７月25日，その奥様も先生の後を追うようにお亡くなりになった．天国で，青木先生は奥様に何とお声をお掛けになったのだろうか．

鉄道や船舶など交通機関を楽しむだけでなく，同時に広い目で社会との関わりを考えることの必要性を教えてくださった青木先生．生前のご指導に改めて感謝申し上げ，謹んでご冥福をお祈りいたします．

戒名は「寛山常栄居士」．合掌．

（学部27期，院14期　小松　丘）